

お茶をさつる

松下農園

静岡県掛川市
松下 芳春・章



茶畑動画

初めて静岡掛川市の松下農園を訪れたのは21年前の平成11年だった。スーパーの店頭でやっとう有機栽培の野菜が並び始めた。でもまだ「有機栽培って何」「本当に無農薬で栽培できるの」という基本的なことさえも知っている人は少なかった。有機肥料を少しでも使えば有機栽培だと平気でシールを貼る生産者だった。そんな時、掛川で有機栽培でお茶を作っている畑があるという話を聞き、いちもくさんに向かった。松下芳春さんとの出会いだった。野心的で頑なな人物を想像していたがみごとに裏切られた。

「わたしだけが無農薬にすると、ここで発生した害虫で他の畑に迷惑をかけてしまう。無農薬で栽培できるところはやっていけばいいんですよ」。初めて環境が必要だということを知らされた。さっそく連れていっ

2年後の春、松下さんは小笠山の茶畑にいた。その畑は自宅から車で30分ほど南にある。緩やかな山の斜面を開墾し6000坪の

でもらった畑は小高い山の上であり、林が周りを囲う隔離された茶畑だった。「ここだったら他の畑の農薬は飛んでこない」とすぐ合点がいった。しかしここは最近松下さんに託された畑だった。持ち主が高齢になりこの険しい環境の畑を管理できなくなったのが理由だ。茶農家の高齢化という現実も知った。

まごころ銘茶 狭山園だより
令和2年5月



茶畑を切り開いた。用意された8000トンの堆肥と良質な土は、2日以上掘り返された畑に消えていく。4種の品種5万本以上の苗木がきれいに植えられ、150畝を超える畝が続いている。乗用式摘採機のための畝間も十分間隔をとってある。いよいよこの場所である。松下さんが目指す有機栽培が始まることになる。苗木が植えられてから収穫までには5年がかかる。その間にもやること、やれること、やらなくてはならないことが次々と現れる。防霜ファンやスプリンクラーの設置、そして時期々々におこなう堆肥の追肥。天敵も十分に育っていない茶樹は虫にやられたり、思わぬ病気が発生し枯れることもある。その度ごとの補植作業や春先の遅霜対策など一年を通して手間はかかる。農薬を使

われないということは草だって生える。雑草取りも大事な仕事だ。「お茶の樹は育てるのではなくて、育っていつてくれるもんなんです。私は育つ環境だけをつくるけど後はがんばらなさいよって樹に言うんですよ」とさらっと言いのける松下さんだが、『農薬は嫌いだ。土づくりをしなければうまいものはできない』という芯はぶれない。



「僕たちはおてんとうさんと空気を借りて、お茶に育ってもらって、その命を自分の命に変えさせていた



改植を待つ茶畑

私に乾燥させたものが碾茶だ。この碾茶を臼で挽くと抹茶ができる。元来抹茶をつくる設備には高額な投資が必要となるが、特殊な高温釜を使うことで克服した。無我夢中の3年間だった。今では、オーガニックの抹茶を求めて海外からの引き合いも多い。しかし周りの状況は年々変わってきている。掛川市の茶の生産量も最盛期の半分以下だという。「畑にかけただけの金が回収できなくなってきた。いい茶をつくれるわけがないじゃないですか。でもこれからの若い人たちに

道筋だけはつけてやらなあ」と口を結ぶ。息子の章さんと山の畑に登った。そこでは改植が始まっていた。30年前に植えた茶樹を抜き、掘り返し、すでに2回堆肥を入れた。「今度は京都の品種で碾茶を作ろうと思ってます。遅くとも4月の頭には苗木を植えていけるように準備をすすめています。有機は手間がかかるんで茶一本でやろうと思ったら、いろんな方法をやっていかなきゃ。この樹が収穫できるようになるころには『すっぴんちゃん』のグレードも上がりますよ」と話してくれた。

「おいしいお茶と出会う場所が欲しかったんです。本当の味を知ってもらって、おいしかったと言ってもらえれば又、作れるじゃあないですか」。そう言う松下さんの道探しはまだ続きそうだ。

